

米中関係をめぐる論点に関する一考察

2014年10月17日

京都産業大学世界問題研究所員

外国語学部准教授 高原 秀介

1. 1世紀の間に変貌を遂げた中国:長期的・歴史的視点の有用性

米中関係の歴史的展開:エンプレス・オブ・チャイナ号の中国初訪問(1784年)、米国にとっての使命感(missionary mind)の対象・市場としての中国、sentimental imperialist としてのアメリカ

19世紀末(門戸開放政策)～1990年代前半(冷戦終焉前後):中国は脆弱国家→戦勝国、経済大国・地域大国へ

1990年代後半(冷戦終焉後)～2009年:9・11以降の対中政策は対中宥和、テロリストとの戦い、イラク・

アフガニスタン戦争の継続

分水嶺としての2010年:米中関係は「戦略的協調」から「戦略的対峙」へ

周辺諸国にとって、「弱すぎる中国」は地域秩序の動揺を招く・「強すぎる中国」は力による現状変更の誘因

2. 今後のありかたが問われる論点と課題

- ①軍事力の透明性確保(米中軍事交流の現状)
- ②海洋資源の共同開発(可能性の有無)
- ③サイバーテロ、ハッカー
- ④国際経済の問題(技術協力、金融政策)
- ⑤中国型パブリック・ディプロマシーの功罪(cf. 孔子学院、歴史問題をめぐる中韓連携)